



北海道教育大学釧路校附属小学校サッカー少年団における教育活動の実践報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平岡, 亮 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008542

北海道教育大学釧路校附属小学校サッカー少年団における 教育活動の実践報告

平 岡 亮

北海道教育大学釧路校

A report the practice of educational activity on junior soccer club in elementary school attached to Hokkaido University of Education Kushiro Campus

HIRAOKA Akira

Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

コーチを引き受けて7年目を迎えた、北海道教育大学釧路校附属小学校児童が在籍するサッカー少年団である附属小ファイターズにおける指導者としての活動を、教育活動としての角度から報告したいと思う。

1. コーチをするに至った経緯

筆者は、平成23年4月から現在まで、北海道教育大学釧路校附属小学校児童が団員として在籍するサッカー少年団（附属小ファイターズ）のコーチを担ってきた。筆者がコーチとなる数年前に、それまで附属小ファイターズを指導してきたコーチが他チームに転出したことからコーチ不在となり、附属小学校からの依頼により釧路校サッカー部部員の数名を学生コーチとして派遣したことが附属小ファイターズとの関わりのスタートであった。筆者は学生コーチのアドバイザーとして関わっていたが、学生がコーチを担う余裕を保てなくなったことから、筆者にその役が回ってきたのであった。

附属小ファイターズの子どもたちは、サッカーの能力と経験に乏しく、身体能力においても他チームに及ばない状態であった。試合に至っては対戦相手にかかわらず大差で敗戦することの連続であり、子どもたちはそのことにそれほどの疑問を持っていないという状態であった。附属小ファイターズの代表（子どもの保護者）からは「他のチームに移籍するという選択肢はあるが、移籍しても試合に出られる可能性は相当低い。サッカーは大好きなので、サッカーに触れる場をコーチを確保する形で子どもたちに保障したい。」との要望が示された。つまり、チームとして勝利を望まないが、子どもたちが楽しくサッカーに親しむ場を子どもたちに与えたいという想いであった。そこで、筆者からは次のような事柄を条件として提示し、コーチを引き受けることとした。その条件とは「あくまでも外部コーチとして子どもたちを指導し少年団の運営には関わらない

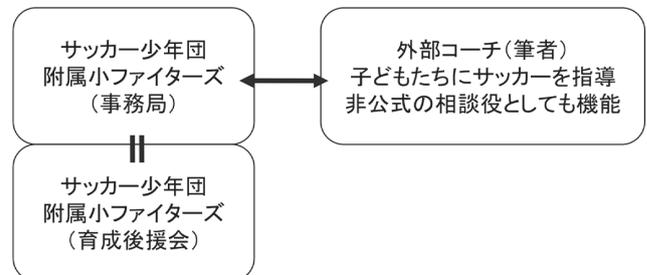


図1 附属小ファイターズにおける筆者の立場

取得しなければならない資格 サッカーD級コーチ サッカー・フットサル3級あるいは4級審判員 スポーツ少年団指導者
JFAID(日本サッカー協会のID)の取得
釧路サッカー協会総会への出席
日本サッカー協会へのチームならびに選手登録(登録費納入を含む)

図2 大会参加をするサッカー少年団が保有すべき条件

- ・子どもたちができることは子どもたち自身に行わせる
- ・可能な限り生活リズムから逸脱しない活動を目指す
- ・試合に勝つことを第一義としない
- ・コーチが提示するサッカー以外の活動も実践する
- ・大学学部の講義に関連して学生が子どもたちと共に活動することに機会を提供する
- ・ボランティアとしてコーチを引き受ける」であった。また、活動を安定化させるため少年団組織の再整備が必要と思われたため、少年団規約の見直しを求めた。

附属小ファイターズは、少年団の統括者および指導者が持続的に特定されておらず、毎年度において代替わりしていく児童の保護者とその役割を担っていることから、組織の継続にとって活動体制ならびに指導体制が整備されているとは言えない状態であった。また、各種大会に出場するためには、少年団が数名の有資格者（少年団、指導者およ

び審判資格者)を保有した状態でサッカー協会(日本、北海道および釧路)に登録されていることが条件となる。したがって、これらの有資格者を保有するとともに団と選手個人の登録を遂行することが、スポーツ少年団が通常の活動を充実させることにつながり、対外的活動を可能とする基盤となるのである。そのための条件整備を少年団規約の整備に求めたわけである(図1、図2参照)。

附属小ファイターズにおける指導を始めるにあたり、年度始めの少年団総会において、少年団に対しての筆者の立場と役割について、そして指導理念と指導方針を明らかにした。それらの根底にはプレーヤーズファーストが存在する。特に強調したことは、子どもたちの自主性を育成すること、個の力を伸ばしながらチームワークに対する概念を育成すること、活動の質を高めることを勝利を目指すことに上位概念と位置づけること(子どもたちの質的変化を目的とする指導を積み重ねることにより勝利は近づいてくるという意識)である。

2. 追加提示した条件について

コーチを引き受けるにあたり筆者が追加提示した条件について示す。

1) コーチとしての立場について

筆者がコーチとして附属小ファイターズに関わるにあたり、筆者は外部コーチとして子どもたちの日常的なサッカー活動を指導し支援するのであり、少年団の運営には原則として関わらないこととした。しかしながら、少年団運営に対しての経験が乏しい保護者にとって、不明あるいは混乱は当然のことながら生じたことから、その都度、相談に乗る関わりを持った。また、少年団が出場するスタッフには原則として参加せず応援者として関わることにしたが、人員不足から臨時スタッフとして参加することが少なくなかった。結果として、筆者は少年団の部外者でありボランティアのコーチではあるものの、大会の臨時スタッフとしても機能する相談役としての位置づけとなった。

2) 子どもたちの自主性の育成

子どもたちの自主性を育成するため「子どもたちができることは子どもたち自身に行わせ保護者(大人)は手を出さない」という覚悟を保護者に求めた。このことは保護者にとって相当に困難なことがらであったようである。コーチ就任当初は、練習用具の出し入れは元より、子どもたちの一挙手一投足に保護者が反応していた(靴紐がほどけると保護者の手が差し伸べられた)。「それは子どもたちだけでできますよ」「それは子どもたちにさせて見ましょう」「それは子どもたちだけでトライさせたいですね」を粘り強く繰り返し、怪我をした場合は「大したことないよ」「水で洗い流しておいで」とし(もちろん怪我の程度を判断し必

要な応急処置は施す)、時として流れる涙には自分で向き合う激励を送った(寄り添わなくてはならないことも多々あったが)。保護者にもこの繰り返しを徐々に受け入れていただけるようになっていった。

3) 生活リズムから逸脱しない活動

多くのサッカー少年団では、指導者が子どもたちを指導するのは指導者に仕事の入っていない時間帯となる。土日祝日を除き通常は17時以降に少年団の練習がスタートし、練習が終了し家にたどり着き夕食を採るのは20時近くになることが珍しくない。後述する学生の活動の関係もあるが、子どもたちの生活リズムに大きな支障とならないよう、15時30分頃に練習をスタートさせ終了時刻は17時30分頃を目指した。当初は、終了時刻は17時を想定したが、保護者の迎えが間に合わないこと、早く帰宅しても子どもたちはサッカーをしていることなどから、18時終了となることが珍しくはなかった。しかし、「コーチ 今日の練習もう終わっちゃうの」と子どもたちが言い寄ってくるよう、練習の終了時刻と練習内容にはこだわりと工夫を凝らした。

4) 試合に勝つことを第一義としないこと

小学校年代(U-12)は育成年代である。子どもたちをサッカープレーヤーズと位置づけた場合、育成には二つの意味と想いが込められている。一つはプレーヤーの個の成長を主眼として指導者は子どもたちに関わるということが重要であるということ、もう一つはそのための良い環境を子どもたちに提供することが求められているということである。

しかし、子どもたちの能力が向上しチーム力が高まるほど、試合に勝つことならびに大会で良い成績を残すことをより強く望むようになりがちである。成功体験が子どもたちの成長に肯定的に影響を及ぼすことは認められているが、成功が繰り返されるとそのことが当然のこととされ失敗することが受け入れられなくなってくる。このことを任意のチームに当てはめて考えると、チームが試合に勝ち大会で良い成績を残すことが第一義となりがちであり、そのためにつながるものが活動の中心となる傾向が強調されるようになる。そうなることを保護者、指導者そして子どもたちが求めて肯定するようになる。勝利に直結しない練習や言動あるいは選手起用そして試合の采配は、否定されるようになる。自分がそのチームで試合に出られる選手として起用されるかに関わらず、いわゆる強いチームへ移籍しようとする志向さえ生じている。個たるプレーヤーの成長を最優先すべき育成年代において、望ましくない状況に陥ることは意外と簡単なのである。一般的に、指導者は大会などの成績で評価されがちであるし、「自分の子どもが何より一番」の保護者は少なくとも発言力も強い。そのような環境でプレーする子どもたちの中には、上手いから何で

も許されると勘違いするプレーヤーが生まれたり、自分は能力が低いからと内に引きこもり退団してしまう子どもが生じることさえある。子どもたちの個としての育成を最優先するために、附属小ファイターズでは、勝つことが第一義となるように向かわせるような志向を子どもたちの指導に持ち込まないことを筆者は指導理念として附属小ファイターズに提示し、附属小ファイターズは少年団の活動理念を支えるものとしてこれを理解し了承した。

5) サッカー以外の活動

サッカー以外の体験活動として、小学校の夏期休業中における1泊2日のサマーキャンプ（サッカーは行わない）、年間を通しての魚釣りを、希望者に対して準備し実施した。

この活動は、少年団関係者間の親睦を図る意図に加えて、子どもたちの心理的側面への刺激を期待して実施されたものである。子どもたちには、いくつかの参加条件を提示しており、自分のことは可能な限り自分で行うこと、単独行動を避けて他者へ注意を払うこと、危険を自らが排除する努力をすること、体調の変化に注意し我慢をしないこと及び大人へ報告すべきことを選択することなどがその条件である。また、活動を通して、自分たちが過ごし活動する場（自然）および自分たちが扱う用具と自分との関係について考えさせた。

6) 大学学部の講義に関連して学生が子どもたちと共に活動することへの理解

筆者が大学で担当する講義の一環で、学生が附属小学校に出向き臨時コーチとして子どもたちと触れ合う場を準備した。学生は練習を複数回参観し、指導内容を検討し、指導実践のシミュレーションを行い、第1回の指導実践を行い、振り返りと2回目の指導実践についての指導計画を立て、2回目の指導実践を行い、最終的な振り返りを行う。このことについての協力を少年団に要請し快諾していただいた。筆者より格段に若い学生の登場に、子どもたちは大歓迎ムードを精一杯に表現するのが常であった。

7) ボランティアとしてコーチを引き受けることについて

ボランティアの外部コーチが自分たちを指導していることへの理解を子どもたちに求めた。このことは言葉だけでは理解につながるわけもないため、機会があるたびに様々な状況下において自分たちを取り巻く環境を考えるひとつとして捉えさせた。

3. 指導に携わった期間の変化について

指導に関わって変化したことがらの主たるものは、試合に勝つ経験を多く味わえるようになったことである。もっとも、附属小ファイターズが所属しているカテゴリーは2部と称される下部カテゴリーである。釧路サッカー協会における小学校年代は、釧路代表として北海道大会などの上

位大会に出場する資格を目指す1部と、地域（釧路）で結果を完結する2部とに分かれており、前年度の成績ならびにチームの希望により参加カテゴリーが決定される（サッカーのみならず冬期間はフットサルとなる）。下部カテゴリーの大会ではあるものの、優勝あるいは優勝を争う体験をする学年を擁する年度もあった。試合のたびに大量失点負けのチームが、成長したと思われる状態となり得た理由は次のように捉えることができよう。

試合で勝利を収めるには様々な要因があり、総合的に相手を上回る必要がある。その詳細に言及することは今回の目的ではないため他に譲るとして、主に子どもたちの内面的変化について主観的ながら掘り下げてみようと思う。指導初期の子どもたちは、提示した練習をこなそうとするものの、適切な技術指導さえ経験したことのないことから動きはおとなしく弱々しかった。練習前後には多くの発言はあるがサッカーに関したのではなく、練習中は無言に近い状態であった。試合に至ってはそれが助長されていた。

それらの状況を払拭するために指導するにあたり心がけたのは、主に二点についてである。一つは、どのようにすると指導を受けているテクニックができるようになるのかを具体的に説明すること、そのテクニックは試合のどんな場面で使用しそのテクニックの発揮によってチームが受ける恩恵を受けるかについて説明すること、これらを繰り返し説明した。つまり、テクニックを手に入れる方法、テクニックの使い方の理解テクニックを使うことが可能な状況の理解およびテクニックを発揮することによる効用の理解などをセットとして伝えたことになる。もう一つは、プレーしたことの結果と試合結果を決して否定しないこと、なぜそのプレーを選択したのか及びどんなプレーを試みようとしていたのかを子どもたちと共有すること、わずかな成功でも肯定し褒めること、これらを徹底して継続した。また、どんなことにも挑戦して失敗を楽しむよう働きかけ、失敗を肯定した。少しずつではあるが子どもたちが発揮しうるテクニックが増えプレーの質が上がっていった。できるようになったテクニックは試合中に使用するようになる。できるようになったことを褒め、試合中にトライしたことを褒め、成功したときはさらに褒めた。自身が肯定されることの繰り返しが、子どもたちの積極性と自主性に刺激として作用したものと判断しうる変化として手ごたえを憶えた。試合中にプレーに関わろうとする回数が増え勢いが増していった。訊ねなくても自身のプレーに関する情報を筆者に伝えようとするようになっていった。プレーを臆する場面が減じて、堂々とプレーする場面が増えていった。おそらくは自分に対する自信が育まれ行動に反映されたものと考えている。実は、このように子どもたちに自信を持たせることが様々な働きかけの狙いであった。

子どもたちに積極性および自主性が助長されると、自我の強調が垣間見られるようになる。このことを弊害と捉え

るのではなく、成長の一過程として受け入れることが寛容であった。

附属小ファイターズにおいては、3年生あたりまでが自我のぶつかり合いのピークであり、他者を否定し自身を先頭に位置させようとする言動あるいは自身が正しいことへの理解を求める言動が横行する。4年生からは他者理解が急速に進む傾向にあり、他者の言動に寛容さが見受けられるようになる。このことへのコーチとしての対処方法は、発生した諍いの成否の所在および解決策を子どもたちに示すことではなく、それらを子どもたち自身に見つけ出させることであろう。練習を中断しての検討（当該の子どもたちによる話し合い）は時間を要することが常で、練習時間のほとんどをそのことに費やす場合も珍しくはなかった。これを時間の浪費とみるか否かは、指導者の価値観にゆだねられる。筆者の場合は、子どもたちが自他の自我と向き合う格好の機会と位置づけることにより「子どもたちの話し合い」を指導するための「メニュー」に活用した。筆者に促されて行っていた「話し合い」は自分たちの活動に必要なアイテムであると認識したのか、諍いが起きると「かくかくしかじかなので話し合いをします」と子どもたち主導の行為へと子どもたちは成長させていった。このような話し合いは、6年生に近づくに減少していき、自我との向き合い方に対する学習が進んだように感じられるようにはなるものの、また別の課題が散見されるようにはなる。

前述した「散見する高学年の別の課題」については、ひとつのことで取り上げることに意味はあるだろう。それは「他者への感謝」である。他者は人とは限らず、場、者、自然、機会など自身に関わる諸々の事象が該当する。この事象に対して感謝の気持ちを背景とする応対することが子どもたちの状態となることへの難しさである。感謝の気持ちを背景とする応対ができないこと（あるいはできないとき）の要因として、感謝の気持ちを持つことの意味や意義の不理解、感謝の気持ちを表す方法の不理解あるいは照れ（恥ずかしさ）などが考えられる。例えば「整列して礼（挨拶）をする」という行為があるが（試合と練習前後のセレモニー、試合会場に対しての礼）、感謝の気持ちを相手に伝えることを真剣に表すか否かでは、そのアウトプットには大きな差異が生じる。だらけて人をくったような、相手を見下したような、面倒くさそうないわゆる形だけの挨拶は、挨拶を受けた相手に気持ちが伝わらないどころか不快な思いを抱かせることにもなりかねない。挨拶に関して、筆者は子どもたちに「礼や挨拶は自分の気持ちを相手に直接届けることなんだよ。そのためには、どんな姿勢でどのような表情や発声で礼や挨拶をする必要があるのかを考える必要があるよね。」ということを繰り返し伝えている。ただらした姿勢で「したーっ」「ありがとやしたー（そのように聞こえるので）」と言われても、気持ちは伝わってこないのである。

ところで、筆者は、「相手」という言葉に関わっては特

別な想いを持っている。と言うより「相手」に置き換えなければならない「敵」という言葉に特別な想いがあるのである。サッカーでは、指導者が選手が解説者がアナウンサーが、「敵〇〇」あるいは「敵」を多用している。「敵」にはいくつかの意味が存在し、スポーツ競技において競い合う対戦者（チーム）を指す場合もそれに含まれているが、「自分にとって害をなす者、減すべき相手、かたき」が通用である。英語表記では前者が opponents であり、後者が enemy である。Enemy の意味が通用されている「敵」はスポーツ競技に存在するのであるのか、いや、存在させていいのであるのか。したがって筆者が用いるのは「相手」という言葉なのである。とりわけ、育成年代のサッカーに「敵」を作り出しはならないのである。以前、ある関係者を通じて日本サッカー協会に対して「敵」という言葉を排除する働きかけを要請したことがある。おそらく受け入れられたのだと推察しているが、それから数年後に「敵」という言葉がサッカーの世界では珍しい言葉となり、胸をなでおろしていた一時期があったのであるが、気がつく「敵」は日本を横行している。非常に残念なことである。

さて、附属小ファイターズは学年単位の団員数が期待数から見ると少ないこと、通常の練習を筆者一人で担当していることもあり、同学年間で競い合う場面が不足している。活動は常に近接する複数学年となり、時には1年生から6年生までの全学年が同時に活動することも珍しくはない。つまりは、6年生が全力を出し切って競い合う機会が不足することになる。6年生におけるこの消化不良状態は、この年代に望ましい成長を期待する上で明らかにハンディキャップであった。この消化不良の解消は日常的活動の中では困難であったことから、他のチームと対戦する際に発現する子どもたちの闘争心に頼ることとした。

4. 大学における講義の一環としての学生の活動参加

前述したように、筆者が担当する講義の一環として附属小ファイターズの練習に学生を参加させ、子どもたちに対する指導実践を学生に体験させた。

まずは、子どもたちへのサッカーの指導はもとより、魚釣りあるいはサマーキャンプといった保護者を巻き込んだサービスの活動にも力を入れるなど、学生を快く練習に参加させてもらうための受け皿作りに努めた。それらのことも手伝って、「今度学生が指導にきます」の一言だけで受け入れ態勢は完了する運びとなった。

次に学生の準備である。指導対象となる子どもたちの様子を把握する必要から、練習を観察する機会を2回設定した。その上で子どもたちに提示する活動内容の検討を学生に行わせ、筆者のアドバイスをその検討に加味した。仮ではあるが完成した活動内容に基づき、学生同士が子ども役となり、予備的な指導実践が行われた。この予備的な指

導実践において多くの課題が浮き彫りとなるのであるが、それらの課題を検討に加えて活動内容が完成することになる。ようやく指導実践が行われ、その実践から反省材料を得て2回目の指導実践に望むこととなる（図3参照）。

or.jp

3.JFA/公益財団法人 日本サッカー協会HP、www.jfa.jp

4.永井洋一、少年スポーツダメな指導者バカな親、合同出版株式会社、2007年

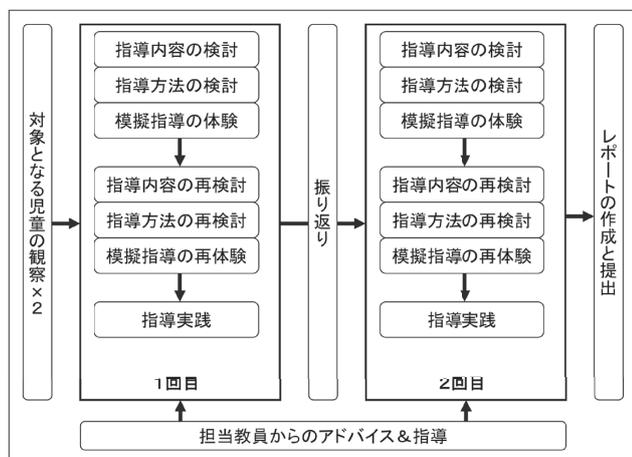


図3 附属小ファイターズ活用した学生の教育的活動

これらの行程において、学生は多くのことを学び吸収する。信頼関係の重要性、指導内容を選定することとは何か、どのように指導すべきなのか（伝え方）、指導を受けている子どもたちの状態はどうか、子どもたちを次のレベルへ引き上げるために何が必要なのか、子どもたちにスポーツを指導するとは何を意味するのか、など考慮し配慮すべきことは多岐に亘るのである。その学びを子どもたちに関わる中で経験できる貴重な機会なのである。

むすびとして

7年目に突入した附属小学校児童が在籍するサッカー少年団における指導を教育的観点から振り返り、活動の報告を試みた。子どもたちに試合に勝つ喜びを与えようともがきながらも勝利を活動の第一義としないという活動理念に悪戦苦闘する年月であった。平成29年度は団員数（子どもの人数）が劇的に減少し大会への参加は叶わない状況にあるが、子どもたちの活動意欲と持続することの意義とに向き合い、筆者は週に1回のペースで子どもたちとサッカーボールを蹴っている。学生の活動参加を継続させていく確約され、本年度も貴重な学生の学びの場が保障された。子どもたちならびに学生の成長を期待して、筆者は報告にある指導を継続する意義の認識を深めて生きたい。

最後に、筆者の活動に対するサポートしていただいている附属小ファイターズの子どものたちならびに保護者の方たち、附属小学校職員の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 1.釧路地区サッカー協会HP、www.kushiro-fa.com
- 2.公益財団法人 北海道サッカー協会、www.hfa-dream.